

## 書 評

Michel Grandjean et Bernard Roussel éd:  
*Coexister dans l'intolérance L'édit de Nantes (1598).*

Labor et Fides, Genève, 1998. ISBN 2-8309-0878-3 544pp.

### 『不寛容の中の共存—ナントの王令 (1598)—』

坂 野 正 則

1998年のフランスは「ナントの王令施行400周年」の年であり同時に「ウェストファリア条約締結350周年」<sup>1</sup>の年であった。そのため、16世紀から17世紀にかけてのヨーロッパにおける「寛容」と「不寛容」の問題がフランスにおいて大きく取り上げられた。特に「ナントの王令400周年」を記念しては非常に多くの本が出版され<sup>2</sup>、多方面で研究が進展した。ナントの王令は1598年に国王アンリ4世によって出され、これによりフランス・プロテスタントの信教が認められ宗教戦争による王国の分裂は一応の収束を見ることになる。この王令の現代フランスにおける歴史的意義は、その宗教的「融和」Concordeの政策にある。ギュイ・ソパンはこれを「信ずる者」と「臣民であること」の区別という近代的な性格の導入として評価している。この見解は彼個人のものではなく、多くのフランス人によってこれまで共有されてきたといえる。つまり、ナントの王令を近代フランスにおける「政教分離」(ライシテ)の原則確立へ

---

<sup>1</sup> 1648: La paix de Westphalie vers l'Europe moderne, Paris, 1998.

<sup>2</sup> 代表的な出版物として、

G. Saupin/R. Fabre/M. Launay (dir.), La Tolérance: Quatrième centenaire de l'édit de Nantes: Colloque international de Nantes, mai 1998, Rennes, 1999.並びに G.Saupin(dir.), Tolérance et intolérance. De l'édit de Nantes à nos jours, Rennes, 1998.を挙げておく。

の出発点と考える見方である。より古典的な図式を採用すれば、フランスにおける近代市民社会成立の過程における公的な「市民」Citoyen の出発点にこの王令を位置付けることもできよう。このように、これまでナントの王令やフランス宗教戦争期におけるポリティーク派は政治思想史の文脈で語られることが多かった。いわばこれ以降の啓蒙主義、フランス革命を経て第3共和政策期の政教分離へと至る「創出的事件」l' évènement fondateur として捉えられてきたのである。さらには、フランスという枠を越えて世界史の中での「寛容」における特別な位置をナントの王令に与えてきた。

20世紀の歴史学は特にその後半期において、一国史観からの脱却、隣接諸科学との対話、様々な研究アプローチの出現が見られた。こうした成果を取り入れ様々な面からナントの王令を研究した書物が今回紹介する論文集であると位置付けることができよう。この論文集は、ジュネーブ大学プロテスタント神学部のミッシェル・グランジャンとフランス国立高等研究院宗教科学部門(「近世ヨーロッパにおける宗教政策とプロテスタンティズム」)の研究主任ベルナル・ルッセルの共編で1998年に出版された。この論文集は、元々『フランス・プロテスタント史協会紀要』のナントの王令特集号<sup>3</sup>として出たものを論文集の形で再版したものである。本書の特徴をまとめておくと、ナントの王令の総括として構成された論文集ではなく、むしろ現在の研究への理解を発展させることを目的としているという点が挙げられよう。そのため狭義の意味での歴史学にとどまらず、宗教・図像研究など広範な専門分野の執筆陣によって構成された論文集である。また視野という点でも、地域的な議論からヨーロッパ世界の国際関係の議論に至るまで非常に広大である。

次に具体的な本書の構成についてであるが、本書は全体で6部から構成されている。第1部では、〈王令の日付〉と題され、ジャン・ルイ・ブルゴンの論文「ナントの王令の日付：1598年4月30日」が収められている。この論文では、1598年4月30日のナントの王令発布日がキリスト昇天の祝日であったことから、一般に現実主義と考えられがちなアンリ4

---

<sup>3</sup> Bulletin de la Société de l'Histoire du Protestantisme Français, Tome 144 (Paris, 1998).

世の信仰心や17世紀にこの発布された日が改ざんされたことの背景を探っている興味深い研究である。第2部は〈王令のまわりで〉と題され、5つの論文が収められている。ここでは、王令以降の改革派教会の変遷、王令の前提となる宗教戦争期の和平王令、ナントの王令と対スペイン戦との関係といった問題が取り上げられている。第3部は〈仲介者達〉と題され、ナントの王令成立に至る両宗派の意見の牽引、調停、あるいは王令の調印に従事した人物についてその人物像を鮮明にしながら論じた論文が6本収められている。第4部は〈受容〉と題され、地方社会・カトリック教会・国王への陳情書・ローマ教皇庁といったものをテーマにして、ナントの王令がいかに受容されたかという問題について論じられている。特にエクス・プロヴァンス高等法院の王令に対する2年にわたる抵抗（ガブリエル・オディシオ）やフランスの改革派教会への「寛容」政策と考えられてきたナントの王令の第一の目標は、実はフランス王国でのカトリック教会の再建にあったという議論（マルク・ブナル）などは非常に興味深い。他方、これまであまり研究が進んでいなかったカトリックの総本山ローマ教皇庁とナントの王令との関係に着目した論文（アラン・タロンやベルトラン・アン）も我々に新たな視角と情報とを提供してくれる。こうした意味で第4部は特に興味深い。次に第5部〈諸解釈〉では、ナントの王令をいかに解釈するのかということが2つの点から問題となっている。1つはナントの王令が後世の歴史家や19世紀フランスにおけるカトリック教会、あるいはプロテスタントの歴史家にとってどういう意味を持ったかという研究である。これは先に述べた「創出的事件」としてナントの王令を捉えるという視点に近いが、対象はより広範である。もう1つは近年特にキリスト教世界で重要になってきている「エキュメニズム運動」（全教会一致運動）に対応した観点からのナントの王令の再解釈である。ここでは事件としてよりもむしろテキストとしてのナントの王令を解釈する研究がなされている。この第5部の中で特に興味深い論文が、ベルナル・コトレの「なぜ、ナントの王令は成功したか？」という論文である。彼もまたマルク・ブナルと同様、ナントの王令の目的を「異端」（改革派教会）に対するカトリック教会の計画された勝利と考えているが、特に他の西ヨーロッパ世界における動き、とりわけ16世紀のアウグスブルクの和議や17世紀イングランドの権利

章典や寛容法に加えてナントの王令を考える必要性を提起していることは重要であると思われる。こうしたヨーロッパ規模への視野の広がりを引き継いでいるのが、次の第6部である。〈宗教平和の実現されたヨーロッパ〉と題されたこの部分では、文字通りヨーロッパ世界全体の中でナントの王令が論じられている。16世紀には神聖ローマ帝国の一部でありルター派が浸透していたアルザス地方、南ドイツのアウグスブルクにおける宗教的平和の維持、西ヨーロッパにおける同時代の宗教的平和条約の比較研究といったトピックが挙げられている。しかし、議論が西ヨーロッパに限られている点が少々残念である。むしろ東欧も含めて16世紀から17世紀前半の「宗教的平和」の全ヨーロッパ的現象を考察すればより深みが増したであろう。最後に、ソランジュ・デイヨンとパトリシア・ギュイヨによるナントの王令の図像研究に関する小論が収録されているが、まだ本格的な研究に対する準備段階という印象を受ける。ただ20世紀の我々にとっては、当時の改革派教会に対するイメージや宗派共存の表象といったものは容易には理解し得ない部分も多いゆえに、これからの研究の深化が期待される部門でもある。

1685年10月、80有余年に渡ってフランス王国内における2つの宗派間の微妙なバランスを保っていたナントの王令はルイ14世によって廃止される。この事件は、フランス国内の改革派信徒達の大規模な亡命を引き起こしたのみならず、英・蘭を中心とし西ヨーロッパ、新大陸に展開した政治的・経済的「国際プロテスタント同盟」を成立させる契機ともなった。そして、このことがもたらした文化的意義はその後の西ヨーロッパ世界にとって決定的であったと考えられる。「二重革命」にばかり着目して近代ヨーロッパを考えてきた日本の歴史学において、ナントの王令の問題から西ヨーロッパ世界の歴史や文明のもつ奥深さを考察することは、これからの新たな軸となりえるであろう。他方で、こうした研究は例えばこれまでの「近世ヨーロッパ世界＝不寛容、近世イスラーム世界＝寛容」といった単純な図式の再考に繋がっていくであろう。さらに、現在カトリックやプロテスタントの立場でエキュメニカル運動に参加している人達にとっては、過去の先人達の宗教的共存や交流の努力とその困難さを知るよい機会となるはずである。そうした非常に多岐に渡る研究の可能性を開く出発点とこの論文集はなりえると言っても決して

過言ではないであろう。革命的情熱とは一味違った情熱から近世フランス社会や近世ヨーロッパ世界を考えたい人にお勧めの一冊である。